

## 平成 26 年度第 1 回奈良市総合計画審議会第 3 部会会議録

開催日時	平成 26 年 10 月 30 日 (木) 午前 9 時 30 分から午前 11 時 30 分まで	
開催場所	奈良市役所北棟 6 階第 15 会議室	
議 題	1 前期基本計画の総括について	
出席者	委員	佐藤茂雄部会長、伊藤委員、下谷委員、【計 3 人出席】
	事務局	総合計画策定委員会委員及び関係課長、総合政策課職員
開催形態	公開（傍聴人なし）	
担当課	総合政策部総合政策課	

### 議事の内容

#### 1 前期基本計画の総括について

事務局より、資料 1 から資料 5 の説明を行った。

#### 〔質疑・意見の要旨〕

佐藤部会長 本日は初回でございますので、皆様方、ざっくばらんに語っていただいて、後期の基本計画につなげる前期の総括ということをテーマに、ご意見を自由に述べていただくということにいたしたいと思っております。よろしく願いいたします。

早速ですが、何かお気づきの点がございましたらお願いいたします。私もしゃべりたいことがいっぱいあるのですが、進行役は黙っていたほうがいいと思っておりますので、また後ほど申し上げます。

伊藤委員 まず、この第 3 部会は観光・経済ということで、経済のほうの農林業、商工業、勤労者対策、さまざまな分野がありますけど、今回は多分観光が一番中心的なテーマかと思っております。始めにいただいた資料等を拝見していきまして、評価が 2 つだけ C になっておりますけども、商工、サービス、農林業などの分野ではあるのですが、担当課が奈良ブランド推進とか観光戦略なので、これもある意味観光にかなり近いような検討テーマかと思っております。

ですので、まずこの B 評価ないし C 評価というのが、A 評価も含めてですが、これは市の担当課の評価なので、外部から見たときに本当にこの評価が適正なのかどうかということ、この全体の資料だけでは判断できなくて、本日いただいた紐綴の詳細な資料を検討しないとわかりません。A はともかく、B、C、D。D は論外ですけども、なぜ C なのか B なのかですね、ここのところをちょっとお聞きしたいなと思っております。

佐藤部会長 では、事務局のほうからお願いします。前期の総括の中で、評価の仕方、あり方、それについて、これは今後につなげていく重要なことですから。私のほうも A、B、C の評価のあり方に対して疑問を

持っておりましたので、我が意を得たりと思っております。どうい  
点でA、B、C評価をされたか、ご説明をお願いします。まず、評  
価の方法について、どういう場で、どういうふうに議論されて、こ  
うなったかというところからご説明をお願いします。

事務局 まず、各課がもっている実施計画事業というものがあり、その事業  
の評価をし、それが集まって施策の展開方向の事項の評価、また、  
施策そのものの総合評価と積み上げて評価しております。また、こ  
の評価につきましては課単位、部単位での評価ということになって  
おります。

伊藤委員 もう一つ聞きたいのは、課単位で評価されるけれども、現実に、課  
の中でどういうふうに、誰が評価したのかということです。会議で  
も開かれて合議でこうしましょうというふうになっているのか、課  
長が判断してされたのかという、そのあたりのプロセスをちょっと  
教えていただきたいのですけど。

観光経済部 観光のほうでは、課の中で相談をして出させていただきました。た  
長 だ、担当者は活動指標については、「やったな」というのがあるわ  
けです。ところが、成果指標を見ると全然違うのです。こういうこ  
とをやれば成果があると思ってやっているのですけれども、例え  
ば、観光の例でいうと、成果指標を見れば、宿泊客数については、  
全然到達していないですね。けども、担当者になれば、一つ一つ  
の施策については実施したという気持ちがあり、B評価になってい  
ます。だから活動指標と成果指標、そのギャップが非常に大きく、  
出してから大変申し訳ないのですけれども、宿泊客数の目標は、も  
ともとの目標に問題があり、200万人とか300万人は非常に難しい  
数字と思います。平城遷都1300年祭の際には増えたのですが、そ  
れからほとんど一緒なのですね。ただ、担当者はいろんな施策をや  
っています。夏のキャンペーンをやったり、冬の閑散期対策もやっ  
たりと。やっているんだけど、なかなか成果が上がってない。  
そのへんのギャップがどうしても出てくる場所があります。だか  
ら、やっている者が評価するというのはどうしてもこういう形にな  
ります。成果だけで評価しようとする、全然変わってくると思  
います。

佐藤部会長 そこが一番陥りやすいところでもあることなのですね。最初に、部  
長は目標の設定にあたって、「こういう課題を掲げよう」といった  
コミュニケーションがあって、できれば数値目標、それを掲げない

とA、B、Cの評価はできないのですね。それで各課に任せますと一生懸命やっておられますから、達成感はあるのですが、達成したという実際の実績というのは、これは別ですから。やはり目標の設定がまずされて、それで、その結果どうか、面接して、それから「これはAだな、Bだな」という、そういう評価の仕方を取り入れないところから状況に陥ってしまう。それは、コンサルさんの役目もあるのですが、今回は関与していないのですか。

事務局 評価過程については市役所で行っております。

佐藤部会長 それは一番まずいケースですね。庁内の論理でいってしまいますね。そこは何とか改めないで後期につながらないと思います。伊藤委員、いかがでしょうか。

伊藤委員 今のお話で各担当、現場の方が一生懸命やっておられますことは理解しております。ただ、世の中の状況は激しく変化していますから、当然5年前に設定した目標数値が、今の時点で、あるいは今後5年の間で適正かどうかということは、やはりこの機会に見直す必要がある。このあたりをもう少し視野に入れて見直しを考えたらいいかなと思います。

佐藤部会長 おっしゃる通りで、時代もものすごく変化していますからね。固定したものではなくて見直しということもぜひやりましょう。

下谷委員 今も宿泊者数の話があったのですが、現状で、全国的なレベルからいたしましても、奈良市の旅館、ホテルの客室は、一番下のほうでございます。そういう意味から増やすということも無理なことかもしれません。また、既存の旅館、ホテルで、改装したり、新築する場合、既存のものよりも大きなものは建てられないというような、いろいろ難しいところもございます。我々のように、既存の旅館、ホテルを運営している者が、もっとブランド力を持って新しいものをつくっていくというような、何かそういうところが、建築の部分でもあればと考えます。規制が厳しい中で、難しいことかもしれませんが、もう少し夢のあるものが建てられるよう検討していただいたら、客室数も若干は上がっていくんじゃないかと思います。今のままで客室数を増やすというのはなかなか難しいと思います。また、プリンスホテルが新たに建ったところで奈良らしいものになっていくとは思わないのです。やはり奈良といたら、ブランド力もありますし、旅館、ホテルは奈良らしいものを建てていくという

ことが、大事なことだなどと思います。ビジネスホテルは、ただビジネスライクで建てるものなので、他府県の方がしてもあまり変わらない。やはり僕らが、今まで経営していた者が新しく建替えしていけるような何かがあればいいなと日ごろ思っているのです。なかなか、そこは難しいところがあります。

観光経済部  
長

奈良県の宿泊者数は全国で最下位とか、ブービーとかいう話なのですが、ただ、これは観光だけの宿泊者数ということではなく、ビジネス客も含んでいるのですね。そのあたりを分けずに一緒にして、観光客の宿泊者数が少ないというのですけど、奈良というところは大阪、京都に近いですから、ビジネスの客はほとんど泊まりません。ビジネスの客が結構多いところであれば、宿泊者数は当然増えますから、カウントされます。だから、宿泊客数が少ないという、それは立地上、つまり奈良市、奈良県という立地上の話であって、決して観光で宿泊者数が大変少ないというわけではないと思っています。

規制緩和の話は、緩和すれば、奈良らしい景観が損なわれるじゃないかということで反対運動が起きますし、非常に難しいところです。そのあたり、規制緩和を取るか、委員がおっしゃるように、そういう奈良らしい旅館、ホテルという形を取るか十分な検討が必要です。

下谷委員

僕が思うのは、別に今あるものを倍、1.5倍建てたり、床面積を1.5倍にしたりするということではなく、若干相談したり、何かする余地があれば奈良らしいものができていくのではないかなということ。規制の中でやっていくというのはなかなか難しいところがあって、規制を極端に緩和するというのではなく、何か、若干考えられるところがあったら考えていただきたいという思いです。僕らも、やはり昔から奈良で旅館をやっていますので、奈良らしいものをどうかして建てたい気持ちは、旅館ホテル組合の中でもみんなあるのです。その中で、今はなかなか厳しいものがあるので、そのあたりのところをちょっと考えていただいたらどうかなというところでございます。

佐藤部会長

今、下谷委員は大変重要なことをおっしゃったと思っていますのですが、まず現状認識ということで、奈良は今、年間観光客、ビジネス客を含めてどのぐらいあって、入込客、それから宿泊者数が幾らというふうになっているのですか。

観光経済部長	奈良市は1,400万程度の年間入り込みがあって、140万程度の宿泊があるという、大体そのような状況です。
佐藤部会長	これはほかの都市に比べて、京都とか、和歌山とか、滋賀に比べてどんな位置にあるのですか。
観光経済部長	京都と比べますと、京都は6,000万人以上とかいうことですので、4～5倍になっています。宿泊者数についても600万か700万。とにかく京都とは今4倍、5倍の差がございます。和歌山はそのあたり、調べたことがないのですけれども、ただ、宿泊者数の統計で見ますと、先ほど申し上げましたように、県レベルでいきますとワースト1か、ワースト2、そのあたりをさまよっているのが事実です。
佐藤部会長	これを、1,400万人だとすると2,000万人に持っていかうとか、そういうお考えは今のところないのですか。
観光経済部長	今、その目標値として、1,491万という目標値を一応設定しています。
佐藤部会長	では、現状は幾らですか。
観光経済部長	現状が1,380万です。
伊藤委員	先ほど下谷委員がおっしゃいましたけど、奈良というのは宿泊施設のキャパが限定されているので、その中で2,000万というのはすぐには達成できない数字ですね。あとはオフ対策もあります。稼働率の問題で、稼働率を上げれば確実に増えます。また、ビジネス客と観光の捉え方なのですけれども、ビジネス観光とか、インセンティブ観光とか、ありますよね。こういうのを戦略として奈良市は考えているのですか。そういうビジネスイベントを奈良で誘致していく。会場もなかなか難しいですけれども、そういった戦略の中で稼働率を上げていくためのオフ対策などの検討はされていると思いますけれども、そこを具体的に考えているかどうかですね。 それと、先ほど下谷委員がおっしゃった奈良らしさ。つまり、奈良の魅力を付け、付加価値を上げていく。そうすると、数が少なくても付加価値が高くなれば、少し料金が高くても来てもらえる。それを増やせれば、結局は潤うわけです。ビジネスモデルの構築と書いておられますけれども、それは、まだあくまでも検討課題であって、そのあたりをもっと見直していく中で、具体的に、実践的な施策の

中に反映していただければと思います。

下谷委員 京都や大阪と数字を争うとか、そういうことは、僕は、奈良には必要ないと思うのです。「本当に奈良はこういう何もない、静かなところですよ。1回泊まってくださいね。」といったような、大きいテーマというか、そういうところにもっていく。京都や大阪と張り合っても、数字的に難しいところがありますから、逆に「奈良はこういうところですよ。」、夜の観光は少ないけど、「こういう静かなところですよ。」、一度泊まってくださいね。」といったことや、歴史的なものを日本、世界の方に見てもらおうということが、一番奈良には大事なことではないかという気がするのです。

伊藤委員 今、この施策の中にも「もてなし」というのがありますけど、今の企業に限らず、人々はみんな精神的に負担が大きくて、奈良に来たら癒やされるという精神性が奈良にありますから、そういうのを取り込んで、ビジネスの場所としても、そのビジネスが終わったあとは奈良で休んでもらう、そんな感じでどうかと思います。

佐藤部会長 おもてなしというのは難しい問題でして、オリンピック招致のときにもおもてなしという。日本流のおもてなし、あれは実は海外の人には通用しないのです。この前、ユナイテッドの副社長としゃべっていましたが、彼らは「そういうものは関係ないです。おもてなしというのは、我々が来たときに外国語の表記があるとか、そういうことをおもてなしと言っているのです」と話しておられました。ですから、日本人はこんな意味だと思っていても通じないということも反省しないといけません。

下谷委員 ですが、外国人が旅館に来られて、うちは旅館なので、旅館に泊まられて、旅館のよさとか日本の文化を外国人に伝わるよう、おもてなしをしていったら、外国人もわかってくれると思うのです。それが僕ら旅館、ホテルの役目だと思っているのです。

佐藤部会長 おっしゃる通りです。それは、日本文化というくくりの中でのおもてなしですから。和食もそうですし、それはその通りなのですが、それだけじゃないということなのです。外国の人たちには。それからもう一つ、私もちょっと進行役を忘れまして、委員の中に入っていきますけど、京都の5,000万人、これは京阪電車とか阪急を利用して、近郊の人が行っており、それがほとんどなのです。奈良は1,400万人にしても、そのうち近鉄線とか、どのぐらいのお客

さんがいるのですか。細かい数字をぜひ教えていただきたい。

観光経済部  
長 軌道ということで、J RにつきましてはJ R奈良駅がほとんどです  
ので、250 万人程度。近鉄につきましては680 万人程度というこ  
とで、推計しております。

伊藤委員 そうしますと、残りは自動車ですか。

観光経済部  
長 そうです。

佐藤部会長 観光バスを含めてですか。

観光経済部  
長 そうです。440 万人くらいがバスということで認識しております。

伊藤委員 今後、奈良市がインバウンドを考えていかれるのであれば、海外と  
国内を分けて考えたほうが良いと思うのですけれども。言語対応も  
もちろん必要ですし、Wi-fi の問題もそうです。私が知る限りでは  
外国人の方は、パスの問題でJ Rを利用される方が多いようです。  
奈良市だけで考えるのはどうかと思いますけど、少なくとも奈良市  
内では、J R、近鉄、そして観光バスなど、交通に対して自由に使  
えるようなものとか。あと施設の利用に関して何か観光関連のとこ  
ろとも一緒に、戦略的に何か取り組んでいらっしゃるのでしょうか。

観光経済部  
長 交通関係は県が「ぐるっとバス」ということで、100 円で奈良公園  
から、ならまち、平城宮跡を回ったりしています。

伊藤委員 1回1回ですよ。乗り降り自由、何時間でもフリーといった、そ  
のようなものはありますか。

観光経済部  
長 今のところ、奈良交通はそういう券は若干持っておりますけど。

伊藤委員 Aゾーン、Bゾーン、Cゾーンとエリア・ゾーンがあって、一定の  
料金を払えば乗り降り自由で、ストレスなく乗り降りできる。もち  
ろん案内もついています。そのパスを持っていると、そのエリアの  
いろんな店で割引が使えたりとか、そういうのがあります。あると  
ころですけれども、ウェルカムカードというのがある、それは海  
外の人に通用します。

観光経済部長	そのあたりは、奈良交通単独ですけど、部門があり、おっしゃるように施設と連動してやっています。
佐藤部会長	それは、奈良の観光協会があるでしょう。そういうところと打ち合わせしているのですか。
観光経済部長	いいえ。奈良交通がやっています。
佐藤部会長	<p>そのへんは、全員で取り組まないといけませんね、課題です。それから、今、インバウンドのお話がありましたけど、私も立場上、観光客をいかに増やすか、一所懸命やっています。たくさん来ていただけるように、海外の航空会社など、いろいろとプロモーションに行っております。今、LCC中心にやっていますが、次はいかに回していくかということを考えているのですよ。</p> <p>それで言いますと、中国のお客さんから言いますと、成田、羽田から東海道新幹線で富士を見て関西に来るとい、これはもうやめだということで、今努力してやっています。日本海ルート、それから最近では和歌山までお客さんを案内しています。次は奈良と思っているのですが、その場合、どのようにアピールしたらいいかということですね。「おもてなし」、「静かな奈良」とおっしゃっても、具体的に訴求力がないとご案内できないのです。そういうセールスポイントというものをどんどん発信していくという努力が、ちょっと奈良の場合欠けている気がします。</p>
観光経済部長	<p>奈良は今、例えばEXPOジャパン、旅博ですか、そこでアピールするのは「Roots of Japan」、日本の歴史の始まりということで、とにかく奈良は、清酒発祥の地、大和茶、お茶も初めて中国から奈良に持ってきたとか、あと筆、墨ですね。墨の生産というのはほとんど奈良です。ですから、そのへんを、日本の伝統的なものについては奈良で生まれましたというようなことをアピールはさせていただいておまして、今後もしていきたいと考えています。</p> <p>11月に台湾に市長もプロモーションに行きますし、それからシンガポールは今年行きました。あとインドネシアですね。まだまだ行ったばかりですので、成果というのはございませんけど、まず商品造成という形で話は進めております。</p>
佐藤部会長	<p>それは結構なことですけど、これはどこでもやっていますからね。競争にどう打ち勝つかということですね。</p> <p>それからもう一つ、今、私も一生懸命やっていますが、2016年</p>



「スポーツ・文化ダボス会議」。関西に持ってこようということもあり、先週の日曜日に下村大臣と琵琶湖で懇談を持ちました。下村大臣は奈良でいいと言っているのです。まず、3日やるのですが、関空から来て、大阪で大きな大会をやるのです。あと分科会を京都、奈良、滋賀とかでやろうというふうになっているのですよ。そういうときにまず課題になるのは、大きなホテルがない。つまり、コンベンション機能がない。2,000人入れるところとか。そういうのがネックになってくるのですよね。ですから、そのへんの、まず、ハードの面ですけど考えないといけない。またハードの前に、そういう会議があるという情報をいかにキャッチするかという、そのへんも鋭敏にならないといけないなと思いますね。

観光経済部長 2016年に東アジア文化都市というプロジェクトを、国のほうからクレジットをもらいまして、2016年に奈良市開催がほぼ決定というプロジェクトがございます。ハード面の整備というのは、なかなかすぐはいきませんが、とりあえずソフト面ということで、JR奈良駅を降りたところの総合観光案内所を、JNTOのカテゴリー3、英語、中国語、韓国語3カ国語に常に対応できる、かつ近畿圏の観光案内が全てできると、そういう機能を持ちますと、日本政府観光局(JNTO)からカテゴリー3の観光案内所という認定を受けることができます。それを目指して、来年度予算にあげていくということで考えております。

佐藤部会長 それは奈良独自でおやりになるのもいいけども、やはり関西全体にアピールして協力を取りつけるとか。県内でやっておられるのですか。それとも市ですか。

観光経済部長 市です。

長

佐藤部会長 もうちょっと、大阪を取り込むとか必要ですね。

観光経済部長 大阪もそうですし、県との連携というのがまず必要だと思います。やはり予算規模も違いますし。同じベクトルを向いていませんと、違うベクトルでは力が削がれますので、そのへんは大事かなと思っています。

下谷委員 外国人がよく持っておられる「ロンリープラネット」とか、そういうような雑誌に、もう少し奈良を入れていただく努力をと思います。東南アジアでもそういう雑誌があると思いますし、ヨーロッパ

でも「ロンリープラネット」を初めとしてそういう雑誌もありますから、雑誌の記者に奈良のほうへ来ていただいて、奈良のよさを実際に味わっていただく。そういう雑誌は、旅行される方はよくみんなお持ちですので。そこへ奈良がいつも出ていると。

今まで話を聞いていたら、「奈良は素通り観光でいい」というようなことを昔は書いていたらしいです。だから、そんなことでは困るので、実際にそういう方に来ていただいて、奈良を見ていただいて、また泊まっていたら、また和食を味わっていただいて、奈良はどんなところであるということを実際感じていただいたら、すごくヨーロッパの人に関しては喜ぶというか、興味深いところだなと、奈良の捉え方が変わってくると思うのです。

そしたら、京都はそういうページが何十ページもありますけど、奈良もだんだんページ数が増えてくる。京都のように舞妓さんがいたり、それから大阪のようにUSJがあつたりと同じように、奈良はどういうものがあるかということをもそこへきちっと載せていただく。一番旅行者の方の目に触れますから、奈良へ来ていただくための、すごい1つのツールになると思うのですけど。

伊藤委員 今の下谷委員のご意見に関連してですけど、奈良市からいろんなところへプロモーションに行かれるのも大事ですけど、今言った雑誌の編集者とか地元のツーリストを招いて奈良のよさを見てもらって情報発信してもらおう。そのほうがより直接的、効果的だと思うのですが、そういうこともやっておられるのですか。

観光経済部長 はい。特に今、春日大社の20年に一度の式年造替を来年、再来年に執り行われますので、その式年造替のための商品造成ということで、これは観光協会がエージェントを招いて、春日大社でこういうことをしますという、それは今、させていただいています。それと今、外国の話をされましたが、来月台湾へ行くのはそのために行きます。というのは、現地の人気サイトに奈良の情報が満載されているというような形で、既に契約もしておりまして進めております。今度は実際に行って、向こうの旅行会社にそれを売りつつ、実際の人気サイトに奈良の情報が入るというように、今やりつつあります。またそのへんは報告させていただきます。

下谷委員 それをまた、ヨーロッパのほうにも。やはり、ヨーロッパの方は奈良が多分好きだと思うのですよ、京都より。

観光経済部 日本に来られる外国人の訪問率で、フランスとスペインは日本に来

長	<p>られたうちのかなりの率の方が奈良に来られる。フランス人とスペイン人の率が非常に高いです。これは文化の関係だと思います。</p>
下谷委員	<p>奈良は日本だけじゃなくてインターナショナルの奈良というような、やはり市役所自身がそういう感覚を持っていかないと。僕は小さい旅館ですけども、今は、日本人を迎えることも大事ですけど、外国人を迎えることをもっと上に持っていかないと。人口が違いますからね。そういう考え方に持っていったら、広い考え方をしていく必要があるのではないかと思うのです。</p>
佐藤部会長	<p>観光協会はどんな組織なのですか。会長はどちらの方ですか。</p>
観光経済部長	<p>奈良交通の会長です。 副会長が3人おられまして、下谷委員さんも副会長です。ほか、若草山でお店をやっている方がお1人と、もう1人がお土産物を製造しておられます。その3人が副会長で、理事には旅館の方であるとか、観光関連の事業者の方が主。ほか、お寺さんとかも入っております。組織としては、事務局的には専務理事1名、これは近畿日本ツーリストの現職の職員が出向しています。あと、市から出向が1名おります。あとは観光協会のプロパー。主には観光案内所を観光協会に委託していますので、観光案内所で働く職員が結構おります。</p>
佐藤部会長	<p>では、割と実務の方ばかりで、実務をよく知っている方ですから、機能していますね。</p>
観光経済部長	<p>それがなかなか難しい面もございます。もう一つ、言い忘れちゃったけど、今、中国語をしゃべる方2人と、ハングルをしゃべる方1人を、毎日ではないですけど、ほぼ週4日程度来ていただいて対応してもらっています。それと、お店屋さんの、中国語やハングル語の翻訳の仕事もやっております。 今、観光協会の改革プロジェクトをやっておりまして、観光協会がどうあるべきか、旧態依然のままではいけないのではないかと。先ほどおっしゃったような海外への飛躍であるとか、あとプラットフォーム化ですね、奈良観光の。観光協会に行けば奈良のことは全てわかる、どこでどんな催しを、ここではこういう特別感のある見るものがあるとか、そういうことを全部紹介して、それを商品として売ってもいいし、お知らせするために、そういうことが絶対必要だと。今までのように会員のための観光協会ではなく、それをもう少し広</p>

げていったらどうかなということは考えております。

藤部会長 年間予算は幾らですか。

観光経済部 年間予算は約2億です。  
長 ただ、それは観光協会の、先ほど申しあげました案内所の人件費、これがかかなり大きいので、実質上使えるお金、事業費はかなり少ないですね。

伊藤委員 具体的に、個々の調査票にいきますけど、付箋も貼ってあるのですが、施策の6-04-01、商工・サービス業の振興のところ、Cが付いているものですね。担当課は観光戦略課です。要はいろんな施策をするにしろ、マネジメント能力のある観光協会が必要になってくると。ここで挙げておられるのですが、「まほろば観光大学」の開校の前段で観光戦略基礎調査が平成23年度に行われ、データを収集されたということ。それで、「まほろば観光大学」を開校することやうたっているのですが、ここCがついているのですが、後期基本計画に課題として書いてあるのは、引き続き「まほろば観光大学」のカリキュラムを実施し、観光産業の経営体質の強化を図るといふ、このところはなぜうまくいかないのですか。

観光経済部 ビジネスモデルの構築とありますね。これは、いわゆるビジネスのことについては市の職員というのは全く素人なわけで、どうしていいかわからないのですね。今、やっているのは起業家支援です。起業家支援のことはかなり商工のほうでやっております。ただ、観光のビジネスモデル、これは私ども素人では非常に難しいと思っています。だから、やはりイノベーションであるとか、そのへんで起業家を育成していく。奈良は結構、観光関連の起業がありますので、そのへんはできるのですが、観光のビジネスモデルの構築が、果たして市のほうでうまくできるのかという気もしております。

伊藤委員 この「まほろば観光大学」の対象になる人は誰なのですか。職員なのですか。

観光経済部 いえ、違います。

長  
伊藤委員 一般に募集するのですか。

観光経済部 基本的には観光事業者の従業員です。

長 伊藤委員	観光関連の。
観光経済部 長	ホテルや旅館が主になると思います。
伊藤委員	ホテルの従業員とかを対象にして、「こういうことをやるから能力を高めてください」と。
観光経済部 長	はい。いわゆる接客から経営まで全てにわたって、観光産業に携わる人はこういうことを知っておいていただきたいという形でさせていただく。
伊藤委員	ということは、「こういうことをやりますから来てください」と言っても集まらないでしょう。
川本観光経 済部長	来年の2月か3月ですので、今準備しています。
伊藤委員	まだスタートしていないのですか。
観光経済部 長	今、いろんな先生を呼んできて、といったようなことを準備中です。
伊藤委員	市の職員の方もこういうところに入って、職員自身もそういう知識を持ったほうがいいと思います。
観光経済部 長	それはあり得る話だと思いますけど、まず、やはり観光業の方にと 思っています。外部からの視点でもう一度自分の仕事を見直して いただきたいという気持ちがあるのは事実です。
伊藤委員	Cは、着手が遅れているということですか。
観光経済部 長	はい、そうです。それと、最初に申し上げた観光のビジネスモデル というのはなかなか構築が難しい。だから、それは「まほろば観光 大学」の中でそういう話が出てきますので、例えば「まほろば観光 大学」が成果のあるものになれば、当然またA、Bという形になっ てくると思います。
伊藤委員	スイスなどで、ホテル学校みたいなアカデミー、そういうことをし て人材育成して現場についているけれど、行政がそれを支援をする という形ですか。

観光経済部 長	そうです。
伊藤委員	それは奈良でもいろんな人材養成が必要だと思います。
下谷委員	これにおいても、従業員のモチベーションを上げるということで、やはり施設を改善して、新しいものを作っていかないと、モチベーションだけ上げてくださいますと言っても、なかなかそれは難しいところがある。やはり、僕が最初から言っていますように、改装とか、また建てかえとか、そういうものに対して夢を持てるような、建築をちょっとしやすいような形でないと、これだけを幾ら勉強したってなかなか難しいところがあるのではないかという気はするのですけども。
伊藤委員	それは助成金とか、そういう意味ですか。
下谷委員	いいえ。旅館、ホテルを改装したり、新築したりすると従業員のモチベーションが上がりますので。旧態依然とした中で従業員のモチベーションだけ上げてくださいますというのは、なかなか難しいことではないかなということです。
伊藤委員	それは各事業者さんの努力ということですか。ホテル、旅館さんがもっといい環境を整えていくのにも投資をされる。
下谷委員	そうです。事業者が投資もやらないと、従業員のモチベーションというのはなかなか上がっていかないのではないかと。やっていただくのはありがたいのですけども、それと並行して施設の改善とか、そういうものもやっていかないとという気がするのです。
佐藤部会長	それで、「まほろば観光大学」を、どうやって、何のために使うというふうにされたわけですか。
観光経済部 長	奈良のいわゆる観光業のレベルアップです。質のアップです。
佐藤部会長	それは、入込客を今後増やすためには、これが足りないからこうしようとか、何か。
観光経済部 長	すぐそれで成果が上がるとは思っておりませんが、部会長の意見として書いておられましたけれども、「場格」というのですか、やはり奈良の観光業というのはこれだけ質が高い、そのようなものを

やはり広めていきたいと。そうすることによって、「場格」を上げる。これによって必然的に人は増えるであろうと。やはりロコミですから。「奈良へ行ってよかったよ。」という話が一番ですから。それには、観光業に携わる方の、接客から経営まで全てにわたって、トータルのレベルを上げていていただきたいという思いを持って「まほろば観光大学」を開設する。

佐藤部会長 発案者はどなたなのですか。

観光経済部  
長 市長です。

佐藤部会長 そのこと自体は別に悪くはないですね。底上げという意味ではね。この冬、ミシュランさんの方から、「水乃江」というおいしい料理、ああいうのは意外と知られてないですね。ですから、奈良に来た人に、やはりいかにお金を落としてもらおうかということを考えないといけないですね。ああいうところをリストアップするとか、その数が幾つあるか、京都に比べて大分劣っているのかとか、現状把握しないとイケないですね。

観光経済部  
長 ミシュランの三つ星もございますしね。このへんは当然PRをと思いますが、市では特定の事業者のPRは難しいですので、観光協会がやはりそういうPRをと思います。

佐藤部会長 商工会議所とかね。

観光経済部  
長 そうですね。やはりPRしませんと。ただ、市が一部の業者さんだけをPRするわけにはいきません。そのために、そのためといたらおかしいですけど、観光協会というのは民間組織ですから、そういうこともやっていきます。

佐藤部会長 そのためにはやはり行政も、観光客、入込客をもう少し増やす目標を掲げるとか、できるだけ奈良で消費してもらおうとか、何か打ち上げないとイケないですね。

観光経済部  
長 そうです。それで、一番問題なのが、夏冬なのです。春秋というのは奈良では結構稼働率があるのですが。そのへんの対策ということで、「なら燈花会」であるとか、観光協会の「夏の奈良旅キャンペーン」というものを打ったり、冬は「奈良うまし冬めぐり」ということで県がやったり、それと市のほうも「珠光茶会」ということで

冬場やったり、そういう取り組みはしています。それで、これもやはり続けることによって知名度ですね。「燈花会」も結構いい催しだと思ふのです。関東の友達が来て、連れていくと、「こんな催しをやってるの、知らなかった」ということがあるわけです。だから、どんどん続けて、レベルアップすることによって、そうした催しが宿泊客数、観光の活性化につながるのではないかと。それと「燈花会」などは夜の催しなので。それが宿泊客数の増につながるということをやっています。

佐藤部会長 京都も同じ悩みを抱えていまして、夏と冬、困っているから、昔から非公開の社寺を公開しているのです。これは同じ悩みです。ただ、向こうは数字を把握していますが、こちらもぜひ検証してみて、対前年、少なかったか多かったかとか、過去からやっておられたら、今どんな状態であるのか。この辺はちゃんとされていますか。

観光経済部長 奈良では、一般観光客、それから修学旅行ですね。奈良の場合は修学旅行が非常に大きなポイントですので、分類しまして、その統計はずっととっています。奈良の場合にはやはり1つのイベントがあるときはぐっと上がるのです。例えば1300年事業とか、シルクロード博とか。イベントの後にガタッと下がるということは事実としてございます。

佐藤部会長 ほかにございませんか。

伊藤委員 では、個票でいきます。課題が飛びますけど、観光とも関係があると思うのですが、6-03-01、農林業の振興、資料3の後ろから4枚目ですね、Cが付いているものがあります。奈良ブランド推進課が担当されているものですが、「未実施事業が発生する」というコメントというか、評価が付いていますけれども、今後の後期基本計画の課題として、農林業の振興に関連することで、ここところがよく見えていない。これはどうなのでしょう。担当課の方、関連の方がいらっしゃったらお願いします。

総合政策部長 奈良ブランド推進課は、26年度に新たに設置された課です。いわゆる農産物をブランド化して、農業振興を図って、今年から取り組みをさせていただきましたので、まだこれから進めていくという部分が多く、評価としては低くなっております。今年度やっていますのが、イチゴのブランド化ということで、「古



都華（ことか）」という品種があるのですが、これが23年に品種登録されまして、今ブランド化を図っているところです。奈良市以外でも平群町が生産量的には県下の中で多いということで、これも広域連携協議会を今年5月に発足させまして、商品開発とか販路拡大、そういう取り組みを進めているところでございます。

伊藤委員 4期の総合計画の前期の後半になって立ち上げたということ。当初からなかったということですか。

総合政策部長 ブランド化というのは、当初、前期の計画の中にも入ってあります。ただ、具体的な取り組みとして、今年度から本格的に取り組んでいるということです。

伊藤委員 Cはついているけど、まだ着手して間もないから成果が上げられていないということですか。

総合政策部長 まだ具体的には。「古都華」でいうと、生産農家が今3軒だけということで、なかなか広まってきていない状況です。これはともかく、ある一定量の生産量が必要ですので、そのへんはこれからの課題という形です。

伊藤委員 奈良へ観光で来た方は奈良でおいしいものを食べたいと思っているので、食材としてブランド化を進めるということは大事だと思います。途中になりますが、今資料をいただいたのですが、これはどうなんでしょうか。

観光経済部長 観光客数の推移です。平成20年の宿泊者数が228万になっております。ところが、21年は142万人になっています。これはなぜかと申しますと、統計のとり方が変わりました。というのは、それまでは廃業した宿泊施設や、ラブホテルなども全部入っていました。実数は出ませんので、客室数に稼働率を掛けてやっております。だから、廃業してそのままになっていてもそれをそのままあるという形で計算します。そこで変わりますので、実情に合わせた結果、減っております。平成22年に195万と増えているのは、1300年事業ということで、増加しています。

佐藤部会長 奈良はですね、奈良県ですよ、分散型になっていますよね。飛鳥があつたりとか、そういうまちをかなり持っているのです。奈良県全

体で見ればいいのですが、その中で奈良市がどんな役割を果たすか。例えば、飛鳥に行った人は、奈良市とは関係ないですね。お客様は関係あるのですか。

観光経済部長 実質上は、飛鳥辺りは宿泊施設が少ないですので、奈良から足を伸ばしていただくという方もかなりおられます。ですから、個人的には飛鳥とか橿原、吉野ですね、そのへんの観光の振興ということは奈良市の宿泊者数増にもつながるのでないかと考えております。

佐藤部会長 まだ戦略としては打ち出していないのですか。

観光経済部長 連携という形は話をしております。例えば、斑鳩町ですね、法隆寺がございます。関東のお方などは、法隆寺は奈良市と思って、よく市のほうに、「法隆寺にはどう行くのですか」という問い合わせがあるのです。そんなこともありますし、法隆寺は日本で初めて世界遺産に登録されたところですし、斑鳩町と奈良市が連携してお互いに誘客を進めようということで、この10月に観光の連携宣言をして、今後双方で、例えば交通ですね。法隆寺があつて、薬師寺、唐招提寺があつて東大寺に来ると。逆もありますね。そのへんの交通ルートをもう少し強化しようではないかというような話とか、また、世界遺産は観光のためにあるのではないのですけれども、お互いにPRしていくというような連携をしようと思っています。

佐藤部会長 それは重要ですね。その前に「宿泊施設が少ない」とおっしゃったけど、奈良市も宿泊施設、少ないじゃないですか。ですから、おっしゃったように、どんどん増やすとか、規制を緩めるとか、次に繋げていけばいいのではないですか。

観光経済部長 ご存じのように奈良県が、この市役所の前の土地にホテル誘致しており、今、コンペして2社残っているということで、これはかなり大きな土地ですので、いいものができたらいいなと。奈良市もJRの西側に土地を持っておりまして、何回かホテル誘致ということでやっても、なかなか来ていただけないというのが実情でございます。おっしゃるような多種多様なホテルですね。例えば、小さくても本当に奈良らしいものだとか、今B&Bがありますね。そういうことも大切かなと。それで、大型があり、奈良らしい旅館あるいはB&Bがありと、いろんなニーズがあると思いますので、それに対応できれば。  
ただ、今おっしゃるようが一番奈良で困っているのは大型ホテルで

す。大型ホテルができればコンベンション施設もそこについてまいりますので、それが一番の課題です。

伊藤委員 斑鳩町が規制緩和で、法隆寺の周辺にホテルを建てられるようにしましたよね。

観光経済部長 はい。奈良市でも少しそれを考えています。市街化調整区域というのは用途の変更がなかなか難しい。今までがお店だったら、お店しかできない、住居地区だったら住居しかできないのです。だけど、家が古くなり、それを今度宿泊施設にしようと思ったらできないのです。それを何とかできるようにと。例えば、東大寺の大仏殿の近くは、みんな市街化調整区域なのです。だからあの辺りには宿泊施設があまりないのですね。そのあたりを規制緩和できないかなということ少し考えているようです。

下谷委員 修学旅行の宿泊者数の件なのですけれども、20年ほど前まで30万人ぐらい奈良に宿泊しておられたのですけれども、現状は10万人余り。なぜ、これだけ減ったのかというと、修学旅行の旅館として大きい旅館が廃業ということもあるのですけれども、20年ほど前は必ず飛鳥のほうへ行かれて、サイクリングとかいろいろされて、奈良で1泊して、それから京都にというパターンが多かったのです。けれども、先ほどの話もありましたが、飛鳥のほうへ今は、あまり行かれない、ほとんど行かれない。

伊藤委員 修学旅行でね。

下谷委員 はい。修学旅行で行かれない。そういうこともありまして、京都で2泊されている学校が多い。修学旅行におきましては、京都は110万人ぐらいの宿泊者数があるのですけど、奈良は10万ちょっとということで、大分開きがあるのです。奈良での滞在時間を長くする、そういう施策も必要だと。

一般客も同じだと思うのです。修学旅行も、一般の団体も東大寺の前の駐車場へ入れて、ところが、東大寺とその駐車場の往復で、お金も何も使うところがない状況。1時間ほどで、ほかの、京都とか、大阪とかに行かれるところが多いと思うのです。そういうことで、宿泊にもつながってこない。やはり、ならまちや、今はきたまちもいろいろやっただいているのですけど、そのあたりまで足を伸ばして、奈良でゆっくりしようかと、静かな奈良を味わおうじゃないかと。そういうふうな、何かイメージ的なものをつくっていか

いと、先ほどから僕が言っているように京都や大阪といくら競争しても、競争すること自身がどうかと思います。

ならまちにしても、変なマンションを建てたり、観光にしたら住民が嫌がるのか、そのへんをもう少し整理して、本当にならまちというものをつくっていく。きたまちもマンションとか、そういう大きいものをあまり建てさせないようにするとか、将来を見越したような施策をやっていかないと。「10年後、20年後こういうまちになります。」ということイメージできるような、そういう建築の規制とか、それから古い建物に対しての助成とか、そういうものをしていかないとなかなか完成しないのではないかなと思います。

観光経済部  
長

古い建物の助成は、景観形成、外観の補助、それと、今年から内部改修も補助を出しております。というのは、やはり住んでもらわないとそれを守っていけないということで、内部についても500万まで出すという形で、今年から始めまして、外観の補修と内部改修とセットで、結構、今年は増えました。やはり外観だけでなく、住んでもらって、保存していかないとはいけませんので。

修学旅行の話を申し上げると、やはり子供が半分に減っていますよね。それと修学旅行のあり方が、教育旅行から、USJへ行ったりとか、スキーに行ったりとか、多様化してきています。昔は、みんな奈良、京都に定番で来ました。それがやはり変わっている。ただ、僕は、修学旅行は教育旅行ということで、飛鳥へ来て、奈良へ来て、京都へ行ったら日本の歴史をたどれるわけです。飛鳥、奈良、京都、このルートというのは本来日本のルーツをたどる非常に大事なルートだと思うのです。子どももそれは連携してそういう打ち出しをしていかなければいけません、国のほうも教育旅行という、日本の歴史の大切さ、それを考えていただきたいなと思います。

佐藤部会長

これはJTBの仕事なのです。二、三年先を見越して、JTBにぜひ飛鳥、奈良、その連携を含めて修学旅行に取り入れてくれと、商品造成をしつこくお願いしたら、やってくれますから。これはどこがやるのか、観光協会がやるのか、そのあたりは少し考えないといけないですけど。

観光経済部  
長

市のほうも東京からの修学旅行誘致ということで、中学生は東京からかなり奈良、京都に来ていただけますので、東京観光オフィスということで近畿日本ツーリストに委託しているのですが、中学校を回ってもらって奈良への誘致は行っているのです。ただ、会長がおっしゃるようにそういう商品造成ですね、その話が大切です。何

で奈良に来るかという目的がないと、ただ「来てくれ、来てくれ」では。

佐藤部会長 圧倒的に強いのはJTBです。

下谷委員 僕らも、JTBのほうへ旅館やホテル関係の観光誘致に行くのですが、そこで言われることが、ちょっときついですけども、「奈良へ行って何があるのですか。京都に2泊泊まりたい学校が多い中で、奈良に1泊していただく、そういう魅力的なものがあるのですか」と、そういうことをよく言われるのです。それは旅館の努力不足もあります。また、観光に対して新しい魅力があるのか。歴史、歴史というのは僕らが勝手に言っていることであって、学校の教育旅行に関しては、先生方はどういうものを目的としているとか。そのあたりの調査をきっちりやりながら、僕らは「歴史を勉強してください」と言っていますが、先生はそれを求めてないかもわかりません。そのあたりの、奈良へ来ていただく目的というか、それは今何であるかを調査して、それを構築していく。奈良は観光資源がたくさんある中で、そういうものができれば、もっと強力なものになる。京都であれだけ泊まっているのだから、奈良へ1泊ぐらいしていただければ、それで10万人を20万人ぐらいにするには、それほどの労力は要らないと思うのです。1時間半以上かけて京都で泊まってはるわけだから、奈良へ泊まっていたけるようになるのではないかと思うのです。

観光経済部長 太宰府市とは、東大寺の関係で奈良市と友好都市です。太宰府は再来年から5年間、今まで来てなかったのですけれど、中学生は奈良に修学旅行に行くことを決めてくれました。これは市長の働きかけがあったり、東大寺さんの働きかけがあったりということで、太宰府の市内の中学生が全員来るということに決定しています。そういう取り組みはあります。

伊藤委員 その修学旅行の問題で、昔はまさに修学、学習のための旅行だったのが、今は体験型が増えている。これをセットにして今、飛鳥で取り組んでいるのが民泊なのです。民泊してもらって飛鳥を観光してもらおう。だから奈良も東部がありますよね、あそこで民泊してもらって、1泊市内で泊まってもらおうとか、それで歴史を学習してもらってですね。要は、いわゆる日本人の生活の原点というか、中山間部での生活体験の学習。これは東部のほうの振興にもなりますし、飛鳥でそういうことをやっていますから、奈良でできないことはな

と思います。飛鳥はそれを小・中学校、高校まで含めてプロモーションをかけて、かなり実績が上がっているようです。

さらに、今度はインバウンド、海外の人も相当取り込んできており、日本の民家に泊まって、日本の生活体験ができるということで、かなり人気があって、毎年かなりの数、来ているみたいです。そういうことを含めて考えていけば、東部の振興にも役に立つという意味で、新しい戦略と仕組みを奈良としても考えてもいいかなと思います。

話が飛びますけども、見直しの機会なので、農林業の振興とあるのですが、これは特に東部エリアの話だと思うのですが、合併されて奈良市になったのですけど、農林業のウエイトというか、奈良市の中で振興と掲げるときに、どんなものなのですか。

観光経済部  
長

おっしゃいましたように合併しました都祁とか月ヶ瀬というのはかなり農林業中心であるのですけれども、奈良市全体でいいますと、農林業の位置づけというのはそう高いものではないです。ただ、それではだめだということで、6次産業化ということで、東部地域の定住対策であるとか、東部地域の振興ですね、それを奈良ブランド推進課のほうが中心になってやっております。

伊藤委員

6次産業化の中で、農業観光、林業観光ということで、観光産業にもなるわけです。例えば林業、木を伐採するとか、そのようなことを子供たちに体験、見学してもらおう。安全性の問題がありますけど、そこを埋めたら、そういうところで宿泊してもらって、いわゆる歴史だけじゃなくて、そのものを見てもらう。もちろん農産物のブランドをつくるということも大事ですけども、多面的に考えられたらいいことだと思うのです。

佐藤部会長

6次産業化は大きなテーマですね。

下谷委員

一つ気になっていることがあります。ドリームランドの跡地、あそこをもう少し奈良らしいものに、それは費用もかかることですが、思い切った施策をぜひ考えたいと思います。僕が考えているのは、あそこに大きいスポーツ施設をつくって、強化合宿とか、いろいろな、例えばAチームのそういう選手が来る。サッカースタジアムとか、お金がかかるかもわかりませんが、そういうものをつくって、歴史とスポーツ、奈良は歴史とスポーツでいけるというようなところを。それはお金も大変なこともかもしれませんが、うまくやって、スポンサーを付けることもできれば。環境のい

いところで強化合宿ができるような施設をつくればと。

観光経済部  
長 ラグビーのワールドカップの関係で、その事前合宿とか、そういう話もやっています。

下谷委員 でも、あの現状では、草が生えて、手入れをしてもらわないと。

佐藤部会長 所有者はどちらなのですか。

観光経済部  
長 今、競売にかかっています。

下谷委員 いろんな話がありますが、あそこを思い切って活性化する。奈良らしい、スポーツの奈良など。

観光経済部  
長 規制がかかっていますので。ただ、おっしゃるように、スポーツ施設だったら可能かなとは思いますが、風致等の規制がいっぱいかかっていますから。

伊藤委員 あと、本日出ている重点検討項目の中で、まだ言及していないものがあるのですが、よくわかるように教えてほしいのですが、勤労者総合福祉センターというのは具体的にどんなことをやっているのですか。老朽化もあるけども、活用が十分でないということなのですか。場所は、どこですか。

観光経済部  
長 JR平城山駅の西側です。平城ニュータウンの東から24号線を渡って東側です。内容としましては体育館とか、あと講座関係ですね。勤労者が学べる、以前はパソコンなんか結構やって、今は、パソコン教室は少ないですけども。それとスポーツジム、テニスコート。「公民館とどう違う」と言われたら、ちょっと難しいところがありますが、基本的な成り立ちが、勤労者のための文化、教養を高めるための施設です。  
それと、もう一つ、中小企業者の福利厚生の仕事、これはたまたま勤労者総合福祉センターの中でやっているだけなのです。別の事業ではあるのですけれども、中小企業者の福利厚生を部門を実質上やっております。

伊藤委員 かなり老朽化しているのですね。

観光経済部 そうですね。テニスコートも、もう剥げています。

長 伊藤委員	そのセンターの部屋は。
観光経済部 長	少し老朽化しています。
伊藤委員	だから今後の問題として、更新するのか、あるいはもう取り壊すのかということも長期的に考えておかないと。
観光経済部 長	そうですね。もともと国の建物を譲り受けたというような経緯もございまして、簡単には取り壊せない部分もあるのですけれども、長期的にどうするかということは考えていかないといけないと思っています。
伊藤委員	このまま存続していったら、活性化というか活用が見込めないのですか。
観光経済部 長	私もよく利用するのですが、全然利用者がいないわけではありません。ただ、定期的なメンテが必要だと思うのです。定期的にメンテすることによって長持ちします。奈良市の場合、大変申しわけないけど、そういう定期的なメンテはほとんど予算がつかいませんで、どんどん古くなる一方ということがございます。やはり何年かに一度メンテすることによって物は長持ちする。壊すより、利用者がいるものにつまましては使っていくということがいいかなと個人的には思っていますが、それは市の判断になりますので。
伊藤委員	要は文化的というか、スポーツ面での厚生施設というのもあるけれども、もう一つ大きな目的に就労機会の確保というのがありますが、これは機能しているのですか。
商工労政課 長	就労機会、例えばパソコン教室とか、そういう教養を身につけて、それを結びつけようということです。
観光経済部 長	実質的には、今公民館とあまり変わらないような使われ方をしています。
伊藤委員	だから、それならそれで、この施設そのものの存在意義、あり方を考えなければならない。
佐藤部会長	そういうことですね。



伊藤委員	予算をそっちのほうにシフトする、それはできないのですか。
観光経済部長	できないことはありません。公民館に組み入れるというのはできないことはないと思います。
伊藤委員	就労支援は厚労省とかハローワークとか、そういうところに任せて、要は機能を見直すと。 あと、これも検討課題になっている奈良町にぎわい課、ならまちは多分、奈良市観光の1つの拠点だと思うのですがけれども、空き家、町家バンクも含めて、ここは。
観光経済部長	町家バンクにつきましては、空いている家を利用したい方ですね。利用したい方と、「この家は空いているから利用してください」という方のマッチングをやっていますけれども、利用したい方は十分います。ところが、貸すという方が少ないのです。だからマッチングがなかなかできない。それ以上は借地借家法とか、そのあたりの問題とかあります。それと契約になりますと、これは行政がなかなか入れない部分がございますので、そのあたりをどうするかという問題があります。 基本的に、何年か貸して返してもらおうとか、そういうようなことをはっきりさせる方がいいかもわかりません。というのは、貸すほうに非常に抵抗があるのです。空いているのだから、安い値段でも貸したらどうかと思うのですが、なかなかそれがいかない。借りたい人は本当に多いのです。100人以上登録があるのですが、貸したい人の登録がないので、マッチングが進まないというのが事実です。
伊藤委員	これは行政が仲介するということおかしいけど、直接、所有者と借り手が契約するのではなくて、仲介して、間違いなく5年後、10年後は返還しますとか。
観光経済部長	それはできないのです。宅建の関係とかいろいろありますので、行政ではちょっとできない。言い切ることはできませんけども、行政が間に入るのは、今の制度ではちょっと難しいのではないかと思います。
伊藤委員	行政が借り上げることもできないのですか。
観光経済部	それはできます。

長 伊藤委員	借り上げて、また貸すのはだめなのですか。
観光経済部 長 伊藤委員	いや、できます。 では、借り上げて、貸してはどうか。できるのであればそうすれば。
奈良町にぎ わい課長	町家自体の状態にもよると思うのです。現在、町家バンクで取り扱っている物件というのは、長らく空き家であったものが多いので、それを実際に使う状態のときに誰が改修するのかということが非常に大きな部分になっております。大概、持ち主の方はもう活用しないから空き家をしているので、貸す、借りるにしても中の改修は借り主でやってよと。ただ、借り主のほうはできるだけ安価でその町家を活用したいと思われている。ということになりますと、では実際、町家としての活用できるような状態に持っていくお金を誰が出すんだというところで、なかなか話がまとまらないというのも事実だと思っています。 そこに、例えば、今お話にございましたように、市が借り上げて、サブリースなどというような形というのも考え方としてはあるかと思うのですけども、では、その町家の改修費用を市が出すのかということになると、その財源はどうなるんだというような問題もありまして、動きたくてもなかなか動けない部分というのがあるのは事実です。
伊藤委員	行政、市が借り上げて、手を入れて、そのコストを家賃で回収するというのはどうなのですか。
奈良町にぎ わい課長	町家の賃料の相場なのですけれども、借りたいという方の賃料のお考えというのはかなり低いレベルで動いておりまして、ただ、一方、皆さんもご存じのとおり、ならまちというのは結構ブランド化されていますので、貸したいと思われる方はできるだけ高いお金で貸したい。そこにもかなりの齟齬が出てまいりますので、その解決というの、実際町家バンクをやっておる中では、大きな課題の1つになっています。
伊藤委員	行政でそれが難しいのだったら、民間がそういうのをやるとか。
奈良町にぎ わい課長	民間事業者の方にそこをお貸しする、借りていただいて、そこが回していただくという形というのを模索はしておりますけれども、た

だ、初めにまた戻りますけれども、貸してあげよう、もしくは売ってあげようと思われる所有者の方が、なかなかいない。というのと、実際空いているのですけれども、所有関係がなかなか明確でなくて、持っておられる方、何人かは明らかなのですけど、それ以後、所有権を実際に持っておられる方が非常に複雑になってきているというのも事実で、そのあたりが複雑に絡み合っただけで家が動かないというのが現実で、毎日苦慮しているところです。

佐藤部会長 出尽くしましたか。あと商店街。これはいかがなのですか。商店街の活性化という大きなテーマを抱えているのですけど、お客様を引きつける、魅力のある商店はあるのですが、シャッター通りというのは。

観光経済部長 実際問題、餅飯殿通りは、10年ぐらい前はシャッター通りだったのです。ところが、商店街の方々が立ち上がりまして、パチンコ屋を買って、それをつぶして、若手の起業家のために夢CUBEというのをやったりと、自分たちでかなり努力というか、自分たちの中でされまして、今は大分変わってきました。また、餅飯殿はならまちへ抜ける道です。ですから、人通りもかなり増えましたし、あそこは結構、私個人的には成功事例ではないかなと思っております。ただ、全体的には商店街は厳しい状況です。

佐藤部会長 ひとつのルートができているのですね。

川本観光経済部長 そうです。もちいどのセンター街を通過してならまちへというルートができています。

佐藤部会長 それはいいことですね。

観光経済部長 はい。それと、三条通りも奈良市のメイン道路であり、JR奈良駅から春日大社までつながっています。だから、そこも来年からの春日大社式年造替へ向けて、ルートの整備を奈良市はやっているのです。そういうこともやっていますので、ちょっと変わるかなと思っています。商店街の活性化というのは非常に大事な話だと思っています。

伊藤委員 あと、1つ検討課題になっている、商工サービス業の振興のところで、中小企業を支援するための制度ですね。融資の利用者が伸びない。

観光経済部長	これはなぜかという、制度で選定した事業、これの中身が変わってしまったのです。実際は増えているのですが、この目標設定したあとに制度が変わりまして、違う制度のほうが使いやすいということで、そちらがずっと増えているのです。だから、ちょっと制度の目標設定したこと自体がどうであったかということとはございません。
伊藤委員	ということは、対象を見直さないといけないということですね。
観光経済部長	そうですね。もう一つ言うなら農林のほうでも、目標設定と現実が違うという問題が出ております。農林の耕作放棄地の面積ですけど、85万平米が今50万平米か何かになっているのですけれども、これは統計手法が変わってしまったのです。
農林課長	85万平米というのは、県の農業会議のほうで農業者に対してアンケートをとったときのものです。
観光経済部長	アンケート調査したときはそういうことで挙がって、実際に調査したらもっと少なかったということですね。
農林課長	はい。23年度からは市の農業委員会のほうで現地調査をしております、大きく変わっています。
観光経済部長	これで見ると耕作放棄地が少なくなったなということで、「なぜ、」と思うんですが、統計の取り方が変わったと。融資の関係も同じです。
商工労政課長	それもあるのですけれど、この貸し付け自体が国とか県とか、かなりメニューが多くありまして、選択できるものが多過ぎて、市の目標の設定自体がちょっと誤ったというか、大き過ぎたというのが現状です。また、国からの支援策がどんどん大きくなっておりまして、ちょっと市の貸し付けが不利になっていると言ったらおかしいのですけれども、評価し過ぎているという部分があるのではないかと思います。
伊藤委員	ということは、市の貸付制度が借り手にとってあまり魅力的でないとか、使い勝手が悪い、そういうことですね。
商工労政課	そうですね。同じメニューが多いので、本来どこで借りるかという

長	のは銀行さんでご相談されて、市を紹介するなり、県を紹介するなりされるのですけれども、借りる方の選択肢が増えすぎてしまって、今は国のほうがかなり力を入れているので、国のほうに流れているのが現状なのです。
伊藤委員	そういう制度上の問題もありますけれど、ここに書かれている後期基本計画の課題としても、奈良市の中で起業を増やしていくための風土をつくっていくと。ならば観光でももちろんいいのですけれども、そういう分野で奈良市として起業してもらいたい、そういう制度として考え直すのですか。
商工労政課 長	それにつきましては、今の市長になりましてから若手の創業とか、女性の創業支援にかなり力を入れておまして、2年前、餅飯殿の商業施設を「きらっ都・奈良」という名称に変えて、創業支援施設として活動していきまして、それに加えて、創業者への融資支援、これを昨年度、1,000万の融資制度を設けましたので、あわせてフォローしていくというふうな計画で、今事業を進めております。
伊藤委員	では、「きらっ都・奈良」の中にインキュベーターみたいな機能を持たしているわけですか。
商工労政課 長	はい。現状12店舗の、3年間をめどにそこを卒業して、奈良市内の商店街の空き店舗へまた移っていただいて活性化を図るというふうな、今ちょうど仕組みづくりをやっている最中でございます。
伊藤委員	これに金額まで書いていないのですけれども、1件当たりの限度額って幾らなのですか。
商工労政課 長	創業支援のほうは1,000万。
伊藤委員	1,000万あったら、大きいですね。
佐藤部会長	立派ですね。
伊藤委員	ぜひ起業につながるように制度を見直していただきたい。
佐藤部会長	下谷委員、何かございますか。

下谷委員	<p>あと、後継者の問題。奈良は古い町ですから、僕らは頭の固いところがありまして、若手の経営者が希望を持って、自分のやりたいことをやっていくというような。やはり僕らはだんだんと年いって行くのですが、若い人が自分の夢のあるような会社にしていけるような、そういう異業種交流の、好きなことが言えるような、各組合単位でやっておられるところもありますけども、そういうことも大事だなという気がします。</p> <p>奈良というのは古いから、おやじが頭から押さえつけるような感じで、息子は何か、頼んでもだめなような、何かそんな風土がある。逆におやじをやっつけるような、希望のある、そういう会社、まちづくり、そういうところまでいきたいなと思うのですが。</p>
佐藤部会長	<p>これは大阪も同じなのですよ。事業所は難しいですね。ですから、これは商工会議所の仕事ですね。要はビジネスチャンスに溢れる奈良にしたらいわけですが、その分野は我々の提言になると思います。</p>
伊藤委員	<p>関連して、この頃、大学でも、関西学院大学とか、関西大学でも中小企業の事業経営者のための講座というか、コースをつくってやっていらっしゃるみたいですね。奈良も観光関連の事業者の方がいらっしゃるんで、そういう方のための取組を、それこそ産学連携でやっていく。</p> <p>あと、もう1点だけよろしいですか。せっかくアンケートの分析をしてこられたので、これの見直しの部分にもあるのですが、最後のほうですかね。国際交流の活発化が挙げられているのですが、これは観光戦略課ですね。アンケート調査で見ると、国際交流を活発化するのは非常に重要だと。これは年代を問わず市民の方のアンケートの結果が出ているのですけれども、この部分が一番できているか「わからない」という評価が多いのです。市民にとって国際交流は、国際化の時代だからわかるのだけれど、市が何をやっているかよくわからない。要は、その交流の成果を市民にどうやって還元できるかという、ここが見えないからわからない。確かにいろんな催しをやったり、イベントをやっているけど、市民にとってどんなメリットが、メリットというか成果があるのか。ここをやはり、こういうことがぜひ必要ですと、市として市民の方に国際交流を活発化することによって奈良市、あるいは市民としてどういう成果が反映されるのか、もう少し考えたほうがいいかなと思うのですが。</p>
観光経済部	<p>最近の例で言いましたら、キャンベラから高校生が来まして、それ</p>

長	<p>で音楽交流ということで、これは奈良市の市立高校もキャンベラへ行って、そこで高校生の民泊、ホームステイですね。お互いにホームステイしたりということでやったりとか、あと、この前もオマーンから若い大学生が来て、それを奈良市も協力して受け入れて、これもホームステイして、そういうような取り組みをやってはおるのですけれども。それとあと、最近やっていませんけど、慶州市と西安市と奈良市で3市のスポーツ大会、スポーツ交流ですね。これは3市のスポーツ、例えば軟式テニスの協会は自分たちで行ったりとか、そういうことはやっておるのですけれども、確かに先生おっしゃるように、国際交流の成果は何かというと、なかなか難しいですね。</p>
	<p>ただ、国際交流の根源的な目的はやはり平和と思います。中国人の友達が観光に来られ、若いときからお互いに知り合う、お互いをよく理解し、国際理解ですね。そういうことによって育っていくのが平和につながっていくであろうし、やはり自分の見聞も広がっていく。ただ、おっしゃるように、それでどういう成果があるのかと。世界に、子供の目を開かせていく、それが大事であり、教育委員会のほうとそういう事業をやっておりますので、もう少し教育委員会と連携する。実際にそのあたりどういうふうにしたらいいか、教えていただければ。</p>
伊藤委員	<p>それは多分、市民や自分たちの子供とか孫が、そういう国際交流を進めることによって国際感覚が感じられ、身につくようなところへ持っていければ、学校から帰ってきた子供が「今日、こんなことがあったよ」とか話をするとか。今もちろんやっておられると思うのですよ。もう少し、そこに力を入れたら、自分の子や孫が国際感覚を持った人間に育っていくんだなとわかる。</p>
下谷委員	<p>それと、観光についてなのですけれども、県の観光施策、観光局と市の観光局の整合性というか、同じことをやっておられるとか、そういう重複したり、また全然足りないところもありますから、そのあたりの、県と市の連携といたしますか、無駄のないように観光施策をやっていただきたいなど。もう少し県と市との話し合いをしていただけるような環境づくりを。</p>
観光経済部長	<p>職員レベルでは常にやりとりしています。特に議会のほうでも、そういうご指摘をいただきました。県と市の観光施策が「同じ方向を見ていないのか」といったご指摘であり、当然同じ方向を見てないとおかしいですから。下谷委員さんがおっしゃるのはそのとおりと</p>

思います。

下谷委員 パンフレットなんかで、県も作っておられたり、市も作っておられたりして、県も一所懸命やっているし、市も一所懸命やっているが、同じようなパンフレットができてたり、そういう可能性もあるから、そういう無駄な、無駄と言ったら怒られるかもしれませんが、そういうことのないようにやっていただきたいなと思います。

伊藤委員 多分、奈良市は奈良市のことを考えて、県は県全体を考えていますから、この部分がうまく合わない。とはいえ、やはり奈良県も各市町村も、うまく連携してまとめる方法を考えたらいいと思うのです。

佐藤部会長 本日の皆さんの発言を整理して幾つかにくくってもらい、次回につなげたいと思います。そういう方向で言いますと、外から見ている立場から見ていると、やはり奈良はもう少し関西圏とうまくやる。インバウンドのお客さんを奈良に取り込んで、それから、大阪や京都に回してやるというぐらいの気構え、それをぜひ行政が持っていたきたい。お裾分けをもらうというのではなくて、大阪のお客さんを奈良にではなく、奈良に集めたお客さんを大阪や京都に回すぐらいの、それだけの魅力を持ったところですから、それぐらいの気持ちで取り組んでいくべきだと思います。その手段はいっぱいあると思います。

皆さんに楽しいお話を伺ったわけですが、奈良と斑鳩とか、連携ですね。それで総合力を発揮するという、この取り組みは今の行政には求めることができるわけですし、どんどんニーズのほうから入っていただいて、結果的に垣根が取り払われた、こういうふうに持っていていただきたいですね。

それから、あと1つ、ぜひ次は市長に来ていただいて、市長の熱い思い、ビジョンを、もう少し人数がそろったときに語っていただく。どこからお客さんを集めるつもりなのか、あるいはさっき言った商店街の取り組みとか、こんなことをやっていますとか、市長の観光への想いを語っていただいて、我々がいろいろぶつけ合うということやっていけば、より有効な提言になるのではないかと思います。

事務局 他の部会との関係もありますので。

佐藤部会長 そういうことを言ったらだめです。ほかの部会とか考えずに。ほか



	<p>がまねしますから。ここに来たら、ほかの部会も、俺のところも来てもらおうと、こうなるわけですから、行政の方々はずぐそういう発言をされますけど、そういうことなしにやったらいいと思います。私がお願いに行ってもいいですから、ぜひお願いします。</p> <p>観光経済部長 市長は、観光は非常に思いを持っていますから、多分大きな話が出てくると思います。そこに我々職員がついていけるかどうかという話はまたあるとは思うのですけど。</p> <p>佐藤部会長 そのようなところでしょうか。今日はいろいろとお話をいただきましてありがとうございました。</p>
<p>資 料</p>	<p>【資料1】 施策別の総合評価結果一覧（課別）</p> <p>【資料2】 施策別の「目標の達成度を評価する指標」の実績と目標達成見込み</p> <p>【資料3】 奈良市第4次総合計画 前期基本計画の総括結果</p> <p>【資料4】 施策体系・実施計画事業一覧表</p> <p>【資料5】 奈良市のまちづくりに関する市民アンケート報告書（第3部会）</p>